

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：32643

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K14156

研究課題名（和文）5歳児クラスにおける絵本の読み聞かせと保育者の援助過程の検討

研究課題名（英文）The Study of Reading Picture Books In 5-Year-Old Class and the Support Process of the Teachers

研究代表者

呂 小耘（LU, XIAOYUN）

帝京大学・教育学部・助教

研究者番号：30813125

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、5歳児クラスの絵本や物語の読み聞かせ場面に着目し、幼児たちの参加の仕方とその変容、及び保育者の援助とその専門性を検討した。2年間にわたって、2つの5歳児クラスの幼児たちを観察し、幼児たちは「読前」「読中」「読後」という3つのプロセスにおいても発話が見られた。2名の保育者は以上の3つのプロセスを意識し、場面を展開しているが、具体的な援助の仕方が異なっていた。さらに、経験年数の異なる保育者たちに対してインタビューを行い、保育者の語りから絵本や絵本の読み聞かせ場面の捉え方、今の捉え方に至るきっかけについて検討し、経験年数によってその捉え方が異なることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまであまり明らかにされてこなかった保育現場の絵本の読み聞かせ場面における幼児たちの発話を縦断的に観察し、5歳児クラスの状況や変化を明らかにした。また、保育者の日々の絵本の選び方、絵本や絵本の読み聞かせ場面の捉え方を検討した。経験年数によって捉え方の違いが示唆されたことから、保育者の専門性向上のための知見を提供できたと考える。集団の絵本の読み聞かせ場面は静かな環境ではなく、多声な環境だと示唆されたことから、保育者がその場面を展開する仕方、幼児の発話に対応する方法、さらに絵本の読み聞かせ場面に限らず、絵本を他の活動や場面と繋げていくための視点を提供したと言える。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the picture books reading scenes in 5-year-old class, to discuss how did the children participate in the scenes and their changes, as well as the teachers' support and professional.

Over two years, we observed two 5-year-old classes, the children's utterances were observed in three processes: "before reading," "during reading," and "after reading." The two teachers were aware of the above three processes and developed the scene in the same way, but the specific methods of support were different. In addition, we interviewed nine teachers with different years of experience, to discuss how did they grasp the meaning of picture books and the picture books reading scenes, and what were the triggers to grasp these meanings. It was suggested that the way of thinking differs depending on the number of years of their experience.

研究分野：幼児教育学、保育学

キーワード：幼児の発話 読み聞かせへの参加 絵本の捉え方 保育者の専門性 読み聞かせ場面の展開

1. 研究開始当初の背景

幼児期における言語活動の重要性は10年前の「幼稚園教育要領」の改訂で強調されている。平成29年の改訂では、保育者が指導計画の作成上の留意事項について、言語活動の充実がさらに求められている。改訂のポイントでは、「幼児期における言語活動の重要性を踏まえ、幼児が言葉のリズムや響きを楽しんだり、知っている言葉を様々に使いながら、未知の言葉と出合ったりする中で、言葉の獲得の楽しさを感じたり、友達や教員と言葉でやり取りしながら自分の考えをまとめたりするようにすることが大切」と明記されている。しかし、実際に幼児たちはどのように集団の言語活動に参加しているかについては十分に検討されていない。さらに、保育者がどのような意図で日々の言語活動に臨んでいるかについても十分には明らかになっていない。言語活動場面における保育者の指導方法及びその専門性に関する指標となる知見が求められている。

4～5歳の時期では、多くの子どもが不自由なく生活言葉を使えるようになる(岡本、2005)。そして、小学校に入ると学習言葉を正式的に学び始める。その移行期にある5歳児の時期には、絵本や物語を読み聞かせ活動が日々行われている。さらに、集団で絵本や物語を読み聞かせ活動は世界的にも行われている。欧米では、多くの絵本や物語の読み聞かせ活動は、幼児の言語獲得(語彙・構文・音韻システムなどの獲得)を促進するために行われている(アメリカのProject Head Startの言語活動の介入など)。しかし、読み聞かせ活動は幼児に豊かな言葉や表現を学ぶ機会を提供しているだけではなく、幼児同士や幼児と保育者間の言葉のやりとりが多く発生し、言葉による伝え合いを楽しむ大切な場でもある。すなわち、保育者の意図によって、読み聞かせ活動は単に言語の発達を促進するための活動にも、それともその後の「豊かな人間性」を育成するための基礎となる活動にもなる。さらに、その捉え方によって保育者の専門性が現れる。

2. 研究の目的

本研究では、5歳児クラスの絵本や物語の読み聞かせ場面に着目し、幼児たちの参加の仕方とその変容、及び保育者の援助とその専門性を検討していく。具体的には、1) 集団の絵本の読み聞かせ場面における幼児たちの発話から参加の仕方とその変化を検討する、2) 集団の絵本の読み聞かせ場面固有な保育者の援助の特徴及びその場面固有な専門性を検討する、3) 集団の絵本の読み聞かせ場面を通して保育者の専門性に関する検討を行う。

3. 研究の方法

(1) 縦断研究

公立X幼稚園の5歳児クラスの幼児を対象に、クラスの絵本の読み聞かせ場面の観察、保育者へのインタビュー等を実施し、1) 絵本の読み聞かせ場面における幼児たちの発話とその変化、2) 絵本の読み聞かせ場面における保育者の援助を検討した。X幼稚園での観察は2年にわたって行い、20xx年度の5歳児クラス(男児9名、女児11名、計20人)と20xx+1年度の5歳児クラス(男児14名、女児11名、計25人)という各年度に1つずつの5歳児クラスにおいて参与観察を行った。そして、20xx年度の5歳児クラスの担任は高橋先生(3年目、いずれも仮名)、20xx+1年度の5歳児クラス担任の佐々木先生(23年目)。

観察は週1回行い、期間は20xx年9月～翌年2月(計22回)と20xx+1年度は9月～20xx+1年2月(計17回)。観察期間は登園後～降園まで(9:30～14:00)。観察時は文字で記録と同時に、絵本の読み聞かせ場面をビデオで録画した。

毎回の参与観察後、保育後と語る時間を設けていた。2名の保育者に当日の絵本を選んだ理由やこれからの絵本の計画等を語っていた。

(2) 保育者の語りに関する研究

参与観察の協力者2名や、それ以外の7名の保育者に対しても半構造化インタビューを行った。経験年数の異なる保育者たちの語りから、絵本や絵本の読み聞かせ場面の捉え方、今の捉え方に変わってきた「きっかけ」について検討した。さらに、絵本の読み聞かせ場面における専門性の共通の定義を検討した。

4. 研究成果

(1) クラスの読み聞かせ場面における幼児たちの参加の仕方の検討：X幼稚園の2年間の縦断研究

①目的：クラスの読み聞かせ場面における幼児たちの発話及びその変化を明らかにし、幼児の参

加の仕方はすでに固定されているかを検討する。

②分析方法：クラスの読み聞かせ場面における幼児の発話数を算出し、さらにその時期的な変化を検討した。横山（2003）の分析方法を参考し、絵本の読み聞かせ場面を「読前」「読中」「読後」という3つのプロセスに分けて分析した。

③結果：全体的にクラスの絵本の読み聞かせ場面は「多声な環境」であり、幼児たちは「読前」「読中」「読後」という3つのプロセスにおいても発話が見られた。さらに、「読中」において、幼児たちが集中的に聴いているように見えても、幼児たちの様々な反応が見られ、絵本を通して保育者や他児と交流したい意欲が示されていた。

さらに具体的に見てみると、幼児たちが「読中」に一番多く発話したが、時期による変化の傾向は特に見られなかった。さらに、「読前」において、5月から9月までは幼児の発話が見られなかったが、10月から幼児の発話が見られ、12月と2月のこの2場面において、幼児の発話が増加する傾向が見られた。最後に、「読後」において、5月から9月までは幼児の発話はより多く見られたが、10月から11月までに一度減少し、12月から2月までもう一度増加したことが見られた。以上のように、12月以降、絵本を読む前後において幼児たちは保育者とのやりとりを楽しみ、読む時はより集中できるようになったと推測できる。

(2) クラスの読み聞かせ場面における保育者の援助の検討：X幼稚園の2年間の縦断研究

①目的：2名の保育者の読む様子と保育後の語りを合わせて、読み聞かせ場面固有な援助の特徴及びその場面の専門性の要素を検討する。

②分析方法：2名の保育者は同じ幼稚園で異なる年度において5歳児クラスを担当していたため、ほぼ同じ時期に同じ行事が行われていた。なので、経験年数が異なる2名の保育者がその時期に選んだ絵本とその理由、そして当日の読み聞かせ場面はどのように展開されているかを比較し、保育者が絵本の読み聞かせ場面における専門性の要素を検討した。

③結果：高橋先生は主に絵本の登場人物の中の「主人公」を紹介して、幼児の現在やこれからの体験、そして子どもに取り巻く環境と関連付けるように考えていたが、佐々木先生は絵本の「主人公」だけではなく、絵本の他の登場人物、絵本の具体的な内容やストーリーのような、1冊の絵本に含まれる要素をより多く気付くことができ、さらに幼児とそれらの要素とのより多様な関連性を見出した。以上のように、

また、2名の保育者は絵本の読み聞かせ場面を展開する時、同じプロセスを経て活動を構成していたが、その具体的な展開の仕方は異なることが明らかになった。まず第1に、同じく「集中できるような環境作り」でも、高橋先生のクラスの幼児たちは4人ずつ5行という座り方で椅子に座っていたことに対して、佐々木先生のクラスの幼児たちは特に並ばずに自由に床に座っていた。第2に、具体的な導入の方法及び読み終わった後の対話時の異なる点として、佐々木先生の方は特に具体的な内容を事前に言及せずに緩やかな導入を行ったり、幼児たちが絵本の内容についてもう少し楽しめるように対話の時間を確保して見守ったりしていた。

よって、保育者たちは同じ言葉を使って幼児の姿（例：幼児たちは集中して絵本を聴いている姿）を描いていても、その姿を促すための環境の捉え方が異なるなら、実際の保育行為も異なるのではないかと推測できる（図1）。すなわち、保育の「ねらい」などの保育の専門用語を知っていても、実際にどのような実践の仕方は幼児の姿と結び付けられるか、その間には保育者一人一人が専門用語に対する独自の捉え方（理解）が存在していることが示唆されている。よって、若手保育者が各自の保育の捉え方及び保育行為を形成する段階において、場面ごとの専門性の構成要素に沿ってサポートする必要性があると示唆される。

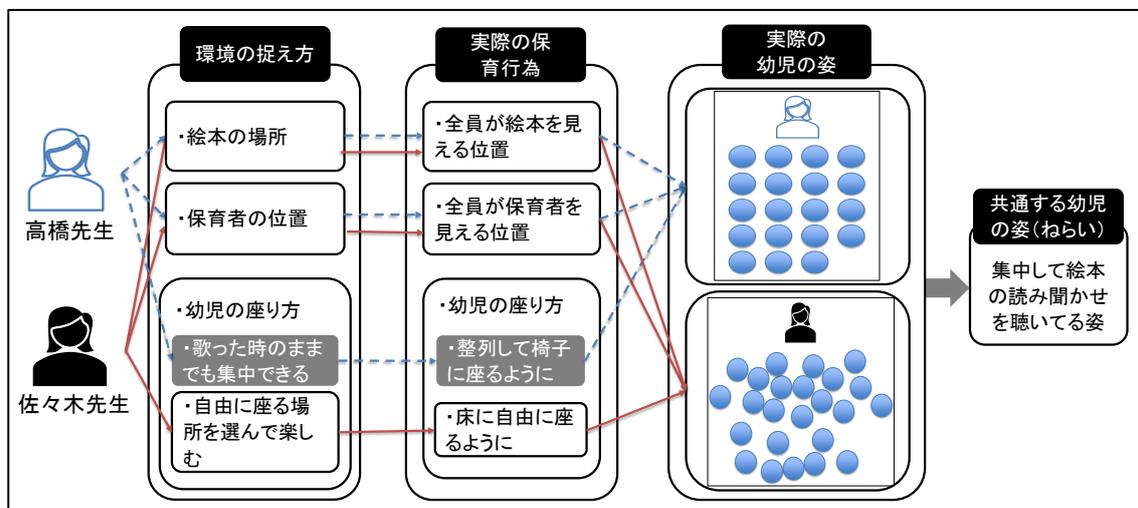


図1 2名の保育者の捉え方によって実際の幼児の姿の相違

本研究は以上のように、2名の保育者を対象にして、絵本の選択とその理由、そして絵本の読

み聞かせ場面における具体的な展開について検討を行った。その結果、まず絵本選びの専門性は1) 絵本を理解力や絵本の要素を分解できる力、2) 幼児を理解し、幼児たちと絵本の要素との関連性を見出せる力、という2点で構成されていることが明らかになった。さらに、絵本の読み聞かせ場面における具体的な展開を検討した結果、そのプロセスの構成上において異なる点がなく、2名の保育者は共通して幼児たちが集中できる、そして絵本に入りやすいように導入を行ったこと、そして読後に幼児たちと対話をした。一方、2名の保育者の具体的な環境の整備の仕方、導入の仕方や読後の対話の展開の仕方において異なる点が見られた。その異なった理由を検討した結果、絵本の読み聞かせのような具体的な保育の場面において、保育者の1つ1つの「専門用語」の捉え方は実際の保育行為に影響し、最終的に幼児の異なる姿として現れることが明らかになった。よって、保育者が具体的な保育の場面を含む専門用語に対する捉え方は、保育者の専門性の要素の1つであると示唆されている。

(3) クラスの読み聞かせ場面を通して保育者の専門性に関する検討

①目的：保育者たちの語りから読み聞かせ場面における専門性の共通の定義を明らかにする。そして、経験年数の異なる保育者たちの語りから、専門性の発達を促したきっかけ、サポート体制の現状と課題を検討する。

②分析方法：経験年数の異なる保育者9名に対して半構造的インタビューを行い（2018年12月～2021年8月）、KJ法を用いて保育者の語りを整理した。具体的には、「絵本の読み聞かせ」の捉え方と「考えが変化したきっかけ」について保育者の語りの相違を分析した。

③結果：全員に共通する考えは、①絵本の読み聞かせは重要である；②原作者の思いに忠実という2点が見られた。そして、経験年数は6年以上の保育者では、③子どもたちは絵本が好きだと思えることが共通していた。さらに、経験年数が20年以上の保育者たちは「絵本」を④楽しさと内容を共有しやすい、気持ちに通いやすい「ツール」だと捉えていた。一方、若手の保育者たちは「絵本の楽しさ」や「一緒に楽しむ」という言葉を言及したが、絵本を「ツール」としてまだ語っていなかった。以上のように、経験年数が20年以上の保育者は、絵本と絵本の読み聞かせの特徴を十分に理解し、読み聞かせの活動に限らず、他の活動にも活かせることを強調し、さらに絵本を通して楽しさを伝えたい、絵本の世界を子どもたちに伝えたいという強い意欲が表れていた。

一方、以上の絵本の読み聞かせについての「考えが変化したきっかけ」を保育者の語りから分析した結果、1) 仕事のきっかけ（例えば、昇進や担当したことのない年齢の担任になった）、2) ライフイベントのきっかけ（例えば自分の子どもの出産）、3) 自分の保育が変わったことがきっかけ（例えば絵本と他の活動の繋がりに気付いた時）、という3つのタイプに分けることができた。保育者たちが語ったきっかけは様々だが、子どもを見る角度を変えたことによって、子どものことをより深く理解できたり、子どもが絵本が大好きということに気付いたり、絵本と他の活動との関連を見出したりして、結果として保育者の専門性の発達が促されたと推測できる。

<引用文献>

- ① 岡本夏木（2005）『幼児期—子どもは世界をどうつかむか』
- ② 横山真貴子（2003）保育における集団に対するシリーズ絵本の読み聞かせ—5歳児クラスでの『ねずみくんの絵本』の読み聞かせの事例からの分析—奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要（12）、21-30.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 呂小耘	4. 巻 9
2. 論文標題 5歳児クラスの絵本の読み聞かせ場面の絵本選びとその展開 – 経験年数の異なる2名の保育者に着目して–	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 帝京大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 呂小耘
2. 発表標題 絵本の貸し出し場面における5歳児の「選び方」の変化
3. 学会等名 日本保育学会 第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Xiaoyun LU (呂小耘)
2. 発表標題 How Did 5-year-old Children Read Picture Books After Lunch In A Japanese Kindergarten?
3. 学会等名 European Early Childhood Education Research Association 第30回大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 呂小耘
2. 発表標題 集団の絵本の読み聞かせ場面における5歳児の反応と保育者の援助の仕方
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第31回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 呂小耘
2. 発表標題 5歳児クラスの絵本の読み聞かせ場面の比較 -若手保育者とベテラン保育者の場合-
3. 学会等名 国際幼児教育学会第41回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 呂小耘
2. 発表標題 絵本の貸し出し場面における5歳児同士のやりとりの変容
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第30回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 呂小耘
2. 発表標題 5歳児クラスにおける絵本の読み聞かせ場面に関する検討 -保育者のねらいと絵本の選び方について-
3. 学会等名 日本保育学会 第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Xiaoyun LU (呂小耘)
2. 発表標題 How Did Principals Think About " Picture Books Reading " According To Their ECEC Experiences?
3. 学会等名 European Early Childhood Education Research Association 第29回大会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 呂小耘
2. 発表標題 保育者の語りから見えた「絵本の読み聞かせ」の捉え方
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会 第29回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関